

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 10 日現在

機関番号：24201

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22401031

研究課題名(和文) 朝鮮史における複都・副都の位置・構造・機能に関する調査研究

研究課題名(英文) Surveillance study about the position, the structure, and the function of the double capital or the subcapital in a Korean history

研究代表者

田中 俊明 (TANAKA, Toshiaki)

滋賀県立大学・人間文化学部・教授

研究者番号：50183067

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,900,000円、(間接経費) 4,170,000円

研究成果の概要(和文)：朝鮮史の複都・副都について比較考察した。高句麗三京、百濟五方、新羅五小京、渤海五京、高麗四京である。高句麗三京は制度的に存在したとはいえないが、漢城は注目される。百濟の五方は地方拠点で、軍事拠点の性格が強い。新羅の五小京は新たな様相が見いだせたが、唐・渤海とは無関係である。渤海五京は唐と関わる。すべてが交通路の拠点で支配の拠点でもある。高麗では西京は国家理念とも関わり特別重要だが、四京として特別な機能があったとは考えられない。朝鮮史のなかで、相互の影響関係があったとは考えがたく中国との関係は肯定すべき部分もある。差はあるが、国家支配と関わり地方拠点としての役割以上の意義が見いだせる場合がある。

研究成果の概要(英文)：About the double capital or the subcapital of each time of a Korean history, the actual condition was investigated and comparison consideration was carried out with China and Japan. Although it cannot say in conclusion that three capitals in Koguryo existed institutionally. The Kudara 5 places are district bases. The Silla capital inclines and it has meaning as a local base. BoHai 5 capital cannot disregard a relation with Tang including main capital. Investigation also followed three capitals and the aspect is clear. It is the existence isolated with royal palace ruins. All are also the bases of rule at the base of a traffic route. The national idea was concerned, Seokyeong was extraordinarily important, and its outing of the king was also frequent in Koryo. Although there was a difference in countries, it was concerned with state control and has checked that the meaning beyond a role of a district base may be able to be found out.

研究分野：人文学A

科研費の分科・細目：東洋史

キーワード：高句麗三京 百濟五方 新羅五小京 渤海五京 高麗四京 複都 副都

1. 研究開始当初の背景

開始当初、日本においても複都制・副都制についての議論が盛んになってきた。現在の東京一局集中の状況を鑑み、首都機能移転が取りざたされることもあって、歴史的な経緯に関心が持たれることでもあろう。韓国ではすでに政府の一部が大田に移り、さらにその近くに新たな行政都市を造成中である(世宗市)。それはまさに複都制であるといつてよい。複都とは、首都とならんだ機能をもつ別の都市がある場合に、首都とその都市とを並列的にとらえていう。副都とは、首都は明確に首都であり、それとは別に、それに準ずる都市がある場合をいう。そうした複都・副都とみられるものが、朝鮮史において、広く登場する。具体的には、高句麗の三京、百済の東西両城・五方、新羅の五小京、渤海の五京、高麗の四京である。しかし、それらの中には、位置がどこであるのかさえわかっていないものがあり、また位置比定はできて、実態がわかっていないものが多く、そもそもそうした三京・五京などが、制度として成り立っていたのか、その実相がどうか、というように、未解明の部分が少なくない。つまり、総体としての複都・副都制については、ほとんど手つかずの状態であったといつてよい。本研究がめざしたのは、そのような朝鮮における複都・副都制の実態解明である。従来、個別の研究は進展しているものもあるが、対象地が中国・朝鮮民主主義人民共和国(以下、北朝鮮)・韓国にまたがっていることもあり、調査が困難な面もあって、全体をみわたす視角が不十分であった。時代ごとの制度的意味や総合的な検討がそれほど進んでいないため、朝鮮史全体を通しての比較、さらには中国・日本の制度との比較や影響関係なども十分ではない。そうした視点も意識して、総合的に朝鮮の複都・副都制度を追究しようとしたのである。

2. 研究の目的

以上のように、朝鮮史における複都・副都について、調査が大きく進んでいるところあれば、ほとんどなされていないところもある。それらのほとんどをメンバー全員で調査するのが極めて重要である。他時代・他地域を専攻するメンバーの視座もえて、成果をふくらませることができるからである。調査対象地域として、特別に重視したいのは、高句麗の漢城・平壤、百済の中方・南方・西方、新羅の中原小京・西原小京、渤海の西京鴨緑府、高麗の開京である。特に高句麗の漢城・平壤、高麗の開京は、北朝鮮にある。現在、政治的な関係は悪く、調査も容易ではないが、わたしはすでに5回の現地調査を実施しており、86年の最初の訪朝以来親しくしている社会科学歴史研究所曹喜勝所長に、09年4月の1週間の踏査に同行してもらい、その間、討議を重ねた。現政治体制を支持するものではないし、彼との研究上での意見も大きく異

なるが、それとは関係なく、研究対象に対する調査には協力を得られる見通しが得られたのである。そのため、新院の都市遺跡や平壤市内の坊里痕跡、開京の羅城などについて調査できると考えた。いっぽう韓国では、特に中原小京の調査について、中原文化財研究所の黄仁鎬研究室長、中原文化財研究院の車勇杰院長との間で、連携して進めることになっており、それと同様な方法を他に地域にも及ぼしていく見通しができた。そうした個別対象地域の調査を基礎において、あらたな全体像に近づくことができると考えた。

朝鮮史における複都・副都は、全体としての調査が困難な状況にあったこともあり、個別にとりあげたものはあるが、制度自体をテーマにした研究が皆無である。本研究は、個別研究を深化させた上で、全体にわたって見渡すことができるような調査を実施するのであり、それにもとづいた総合化が地に足がついたものになるはずである。それはこれまでに取り得なかった方法であり、本研究の特長であるといえる。

3. 研究の方法

現地調査を通して、現地におけるこれまでの研究や発掘調査の成果を吸収し、また立地・遺構の配置等を確認する。そうした蓄積をはかることが主眼である。そしてそれについて相互に意見を出し合って、自らの対象地域の検討に活かす。最後には、それを総合して、王朝ごとの制度、朝鮮史のなかでの、さらには東アジアのなかでの位置づけを考察する。それぞれの調査の時点での相互意見も記録にとどめるが、全体で議論をしたうえで、個別の専門課題に取り組むことにする。

4. 研究成果

朝鮮史の各時代において知られる複都・副都について、現地調査をふまえて個別研究を深化させた上で、各制度の実態を追究し、中国・日本の制度と比較考察した。調査できたのは、高句麗三京のうち二京(平壤・集安)、百済両都(扶餘・益山)および五方のうち二方(公州・古阜)、新羅五小京(原州・清州・忠州・南原・金海)、渤海五京のうち二箇所(上京龍泉府・中京顕徳府)、高麗四京(平壤・開城・ソウル・慶州)で、特に北朝鮮の平壤・開京を調査できたことは意義がある。予定をしながら調査できなかったのは、北朝鮮の新院遺跡であり、漢城にあてられるところである。事前には旧知の歴史研究所所長の好意的な連絡もあって十分に可能であると考えていたが、遺跡現地の反応がよくなく、滞在中最後まで交渉をつづけたが実現しなかった。近年も発掘されているが、情報が極めて限られているため、その調査ができていたならば、高句麗三京についても理解も大きく変わった可能性がある。

本研究を通して得たいいくつかの論考のうち、直接、それらの複都等を追究した結論を

示しておきたい。

高句麗の三京は、『隋書』のみにみえる表現であるが、高句麗のなかでそのように意識されていたのかどうか明証がない。ただ、そのうちの二つは、その時点での王都と旧都であり、高句麗史にとって特別な意義をもつことは当然であり、改めて指定される必要もない。それに対して漢城は、一時期高句麗が領有していた百濟旧王都の名をつけたもので、意識的な造営がなされたものと考えられる。それを含めて、三京が特別であると意識されていたということは十分に考えることができる。ただし、それがどのような機能を持っていたのか、どのような経営がなされたのかなど、史料を全く欠いており、検討することは困難である。漢城については、そう比定できる都市遺跡が、なお発掘が継続されるようであり、その成果を待って、より具体的な検討ができるかもしれない。

百濟の場合は、まず「東西両城」「五方」の問題を検討した。ともに現段階では、複都・副都ということは難しいといえる。

新羅の五小京は、三国の中では最もよく実態がわかるといえ、副都として位置づけられたものであることはまちがいない。調査も進んでおり、中原京・金官京で城壁に囲まれた都市空間があったとみてよい。すべてが一律ではなく城壁をもたない場合もあり、坊里区画がない場合もある。国都が偏った位置にあるための是正と、地方の拠点としての意義を持つ。唐・渤海と対比すると、国都とは全く別で、時期的にもそれらとは無関係であると考えられる。

渤海の五京は国都を含み唐との関係を無視できないが、国都になった三京は発掘調査も進み、様相が明らかになっている。宮殿遺構を持ち、隔絶した存在である。すべてが交通路の拠点で支配の拠点でもある。より具体的にいえば、河南屯古城から出土した河南屯A型瓦当が六頂山墓群の瓦当群と西古城古相瓦当群の間に位置づけられることを明らかにし、その年代を八世紀第2四半期と推定することができた。その結果、河南屯古城を賈耽が記した顕州王都に比定できると考えた。顕州王都としての河南屯古城は上京へ遷都した後に廃城となり、その跡地に墓上建物を伴う河南屯古墓が造営されたと考えている。河南屯古墓の造営時期については、採集された「素」刻印文字瓦と同じ文字瓦が西古城の井戸と1号住居跡から出土していることが手懸りになる。西古城の井戸では、多数の刻印瓦が上京3式に併行する瓦当と共伴しているので、河南屯古墓が八世紀第4四半期から九世紀前半に造営されたと推定できる。

顕州王都から上京へ遷都した三代王・大欽茂が再度遷都した東京で七九四年に亡くなっているが、その葬地は明らかになっていない。私は顕州王都の故地である河南屯古城に帰葬した可能性を考えたい。唐から渤海王に下賜されたと思われる金製帯金具で飾った

ベルトを副葬した河南屯古墓が、大欽茂の陵墓に相応しいのではないだろうか。

西古城は上京造営の直後に建設を開始したと考えているが、その目的は副都制の制定にあったと考えている。顕州から上京へ遷都した後に、図們江流域の支配拠点として西古城を整備したものと思われる。西古城の設計が上京と共通しているのは、上京をモデルとして西古城を造営したことによるのであろう。西古城出土瓦当の40パーセントを占めるAa型(上京3式)が八世紀第4四半期を上限とすることから、八世紀第4四半期から九世紀前半に大きな改修が行われたものと推測できる。西古城から出土した緑釉瓦当もAa型なので、単なる修繕ではなく副都を意識した工事だったことが窺われる。発掘調査では建替えや建物が重複した痕跡は報告されていないが、少なくとも屋根の大改修が行われたことは推測できる。

西古城と共通する様相の瓦当群を出土した八連城も、西古城とほぼ同時に副都として造営されたのではないかと考えている。八連城から出土した瓦当の様相が西古城と共通することにより、二つの遺跡が同じ様な頃に造営されたことを推測できる。八連城も西古城と同じように、上京の造営からほどなく副都として建設が始まり、8世紀第3四半期に大改修がおこなわれたものと思われる。八連城は七八五年頃～七九四年の約一〇年間ほど、上京から遷都した東京として王都になっていた。上京3式の瓦当は、王都になるための改修により葺かれた可能性が高い。西古城も同時期に改修されているが、その目的は東京の副都としての再整備だったと思われる。

西古城と八連城が上京の副都として八世紀第3四半期に造営されて以降は、上京とあわせて三都制が成立していた。西古城は王都にはならなかったが、瓦当の様相から八連城と同じ基準で副都として整備されていたことを窺うことができる。三都制に南京と西京が加わって五京制になったのは、劉暉東氏が述べたように第十代王・大仁秀(八一八～八三〇年)の治政だったと思われる。

高麗では、西京は国家理念とも関わって特別重要で王の行幸も頻繁であった。東京は新羅王都であったことにより、高麗国家としては格別な意義がみいだせない。四京として特別な機能があったとは考えられない。四京のうち王都開京を除く三京についてであるが、三京といっても並列の副都ではなく、若干の格差はあった。なにより政治的側面では西京には分司制度が敷かれたものの、東京と南京にはそうした形跡はない。王朝儀礼の側面では、高麗二大仏教儀礼のうちのひとつである八開会が催されたのも、開京以外では西京のみである。また、三京の長官である知西京留守事・東京留守使および南京留守の禄俸を比較しても、一〇世紀中盤の文宗代にそれぞれ二七〇石・二二三石・二〇〇石、のち一二世紀前半の仁宗代に西京留守は二〇〇石、東京

留守と南京留守は一六六石一〇斗となっており、こうした経済的格差もすでに指摘されている。つまり、三京のなかでも西京こそが副都としての位相をよく示していると結論することができよう。

しかし、高麗副都制の問題はそう簡単ではない。たしかに高麗時代にはしばしば遷都論が惹起され、あらたに宮闕を築いて開京を離れたことはあった。しかしながら、高麗国王が副都に滞在したのは短期間であって、「遷都」ではなく「移御」というべき行動であった。これは高麗末期に惹起される遷都論議の場合も同様であり、開京を離れるのは農閑期に限られていた。とりわけ、東京にいたっては成宗が晩年に一度車駕を出した以外には、巡幸や新宮の建設さえ記録に残っていない。巡幸にともなう儀衛・鹵簿が制定されたのは西京と南京のみであり、東京については規定がない。地域的偏重性のゆえ、東京が高麗の王都候補地として拳論されたことは一度もなかったのである。史料の制約もあろうが、東京に関する研究が立ち後れていることは否めない。それゆえ、高麗の三京制度それ自体の比較分析も困難な状況であり、いまだ多くの課題を抱えているといわざるをえない。

朝鮮史のなかで、相互の影響関係があったとは考えがたいが、中国との関係については肯定すべき部分もある。日本は朝鮮史における複都とは異質で、天皇の居所として意味をもつもので、それらが継続して支配の一翼をになってはいない。朝鮮史では、諸国で差はあるが、国家支配と関わり、地方拠点としての役割以上の意義が見いだせる場合があることが確認できた。

なお、このたびの共同研究の成果は、単行書としての刊行をめざしている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計14件)

- (1) 田中 俊明、三世紀東北アジアの国際関係、朝鮮学報、査読有、230 輯、2014、pp1-29
- (2) 田中 俊明、三世紀の朝鮮半島、歴史評論、査読無、769 号、2014、pp.28-41
- (3) 橋本 義則、日本古代都城の儀礼空間と王権の位相 - 日本古代天皇制と都城 -、韓国古代史研究、査読有、71、2013、pp.317-353
- (4) 橋本 義則、平安宮・平安京の構造と變貌 - 古代都城から中世都市へ -、MUNHWAJAE Korean Journal of Cultural Heritage Studies、46-1、2013、pp.32-75
- (5) 田中 俊明、武寧王代百済の対倭関係、百済文化、査読有、46 輯、2012、pp.145-162
- (6) 桑野 栄治、高麗末期の漢陽遷都論 韓国における中世都城史研究の動向、久留米大学文学部紀要(国際文化学科編)、査読無、第29号、2012、pp.103-131
- (7) 桑野 栄治、朝鮮初期昌徳宮後苑小考、

久留米大学文学部紀要(国際文化学科編)、査読無、第29号、2012、pp.133-163

(8) 桑野 栄治、朝鮮光海君代の儀礼と王権 対明遥拝儀礼を中心に、久留米大学文学部紀要(国際文化学科編)、査読無、第29号、2012、pp.165-206

(9) 新宮 学、中国近世的羅城 以明代南京的京城外郭城為例、城市学論叢1輯(中国・社会科学文献出版社)、2012、pp.289-315

(10) 桑野 栄治、韓国における近世都城史研究の動向 都城空間をめぐる諸問題、久留米大学文学部紀要(国際文化学科編)、査読無、第28号、2011、pp.17-31

(11) 小嶋 芳孝・E.Gelman ほか、ロシア沿海地方における渤海遺跡調査(2010年)、金沢学院大学紀要、査読無、第9号、2012、pp.29-42

(12) 妹尾 達彦、長安の変貌 - 大中国の都から小中国の都へ -、歴史評論、査読無、720号、2010、pp.47-60

(13) 小嶋 芳孝・E.Gelman ほか、ロシア沿海地方における渤海遺跡調査(2010年)、金沢学院大学紀要、査読無、第9号、2012、pp.29-42、

(14) 井上直樹、6世紀末から7世紀半ばの東アジア情勢と高句麗の対倭外交、朝鮮学報、査読有、221 輯、2011、pp.1-42

〔学会発表〕(計15件)

(1) 田中 俊明、復元多羅国史、陝川郡・慶尚大学校博物館(韓国)、2013(招待講演)

(2) 橋本 義則、日本古代都城の儀礼空間と王権の位相 日本古代天皇制と都城、韓国古代史学会(韓国)、2013(招待講演)

(3) 妹尾 達彦、帝都的風景、風景的帝都：建康・大興・洛陽、妹尾達彦、復旦大学中華文明国際研究中心国際会議(中国)、2013(招待講演)

(4) 橋本 義則、平安宮・平安京の構造と變貌 - 古代都城から中世都市へ -、韓国文化財庁開庁60周年記念シンポジウム「高麗開城と東アジアの都城文化」(韓国)、2012(招待講演)

(5) 妹尾 達彦、東亜都城時代の誕生 - 七、八世紀的城市網、台湾師範大学客員講座(台湾)、2012(招待講演)

(6) 妹尾 達彦、漢与唐 - 漢長安故城與隋唐長安城 -、台湾大学客員講座(台湾)、2012(招待講演)

(7) 妹尾 達彦、復原隋唐長安 - 長安的都市計画 出版後 -、長安国際文化研究会(中国)、2012(招待講演)

(8) 橋本 義則、東アジア比較都城史研究の試み - 日本から東アジアへ、そして再び日本へ、京都大学文学研究科・文学部公開講演会・第67回羽田記念館定例講演会、2011(招待講演)

(9) 妹尾 達彦、都城時代の誕生、西北政法大学国際会議(中国)、2011(招待講演)

(12) 妹尾 達彦、隋唐長安城と郊外社会的誕

生、第3届中日学者中国古代史論壇(中国) 2011(招待講演)

(10) 妹尾 達彦、アジア都城時代の誕生 - 7・8世紀の東アジア -、国際シンポジウム「アジアの都市 - インド・中国・日本 -」(国立歴史民俗博物館) 2011

(11) 新宮 学、「洪武の都、南京城の景勝」、明清史夏合宿 伝統都市の形成、2011(招待講演)

(12) 妹尾 達彦、隋唐長安と国際関係の変遷、復旦大学中古中国研究前沿講座(中国) 2010(招待講演)

(13) 妹尾 達彦、隋唐長安の都市文化と欧亚大陸東部の国際関係、唐代文史研究の新視野: 以物質文化為主 唐代文史学者記念杜希徳(Denis Twitchett)国際研討会(台湾) 2010(招待講演)

(14) 田中 俊明、百済の複都・副都と東アジア、2010 世界大百済典国際学術会議交流王国、大百済の足跡を尋ねて(2010 世界大百済典推進委員会・韓国忠清南道歴史文化研究院) 2010(招待講演)

(15) 新宮 学、中国近世の羅城 以明代南京の京和外郭城為例、中国首届世界性城市論壇(中国社会科学院世界歴史研究所・杭州師範大学) 2010年(招待講演)

〔図書〕(計47件)

(1) 田中 俊明、岩波書店、朝鮮三国の国家形成と倭、岩波講座日本歴史第1巻、原始・古代1、2013、全305p(pp.271-305)

(2) 橋本 義則、白帝社、日本古代宮都の獄 - 左右獄制の成立と古代宮都の構造 -、近世東アジア比較都城史の諸相、2014、全316p(pp.221-250)

(3) 妹尾 達彦、白帝社、太極宮から大明宮へ 唐長安における宮城空間と都市社会の変貌、近世東アジア比較都城史研究の諸相、2014、全316p(pp.17-60)

(4) 新宮 学、白帝社、北京外城の出現 明嘉靖「重城」建設始末、近世東アジア比較都城史研究の諸相、2014、全316p(pp.3-14)

(5) 新宮 学、白帝社、近世東アジア比較都城史研究序説、近世東アジア比較都城史研究の諸相、2014、全316p(pp.159-194)

(6) 桑野 栄治、白帝社、朝鮮初期昌徳宮後苑小考、近世東アジア比較都城史研究の諸相、2014、全316p(pp.61-88)

(7) 橋本 義則、東アジア比較都城史研究会、日本古代の宮都と葬地、国際公開研究会「東アジア都城比較の試み」発表論文報告集、2013、全322p(pp.299-320)

(8) 妹尾 達彦、東京大学出版会、イギリスから眺めたアジアの都市、講座東アジア海域に漕ぎ出す第6巻、2013、全264p(pp.73-92)

(9) 妹尾 達彦、山川出版社、東アジアの都城時代と交通網の形成、アジアからみる日本都市、2013、全336p(pp.45-78)

(10) 妹尾 達彦、東アジア比較都城史研究会、東アジアの都城時代と郊外の誕 羅城・禁

苑・壇廟・葬地、国際公開研究会「東アジア都城比較の試み」発表論文報告集、2013、全322p(pp.171-230)

(11) 田中 俊明、東アジア比較都城史研究会、新羅都城制研究の到達点、国際公開研究会「東アジア都城比較の試み」発表論文報告集、2013、全322p(pp.108-123)

(12) 新宮 学、東アジア比較都城史研究会、北京外城の出現、国際公開研究会「東アジア都城比較の試み」発表論文報告集、2013、全322p(pp.244-255)

(13) 桑野 栄治、東アジア比較都城史研究会、日本・朝鮮・中国の祭天儀礼、国際公開研究会「東アジア都城比較の試み」発表論文報告集、2013、全322p(pp.275-298)

(14) 小嶋 芳孝、石川県立歴史博物館、渤海考古学の現状、能登-石川の歴史遺産セミナー講演録、2013、全p(pp.111-125)

(15) 妹尾 達彦、中国・三秦出版社、東亜都城時代的誕生、唐史論叢、14、2012、全410p(pp.296-311)

(16) 妹尾 達彦、中国・中華書局、漢長安故城と隋唐長安城、輿地、考古と史学新説 - 李孝聡教授栄休記念論文集 -、2012、全691p(pp.272-286)

(17) 田中 俊明、韓国・チニンジン、建康の巷と百済、百済と周辺世界、2012、全900p(pp.254-264)

(18) 田中 俊明、大阪狭山市教育委員会、文字資料からみた韓国古代の築堤、狭山池の誕生をさぐる 狭山池シンポジウム 2010:記録集、2012、全164p(pp.95-115)

(19) 小嶋 芳孝、中国・文物出版社、日文要約、六頂山渤海墓葬(吉林省文物考古研究所・敦化市文物管理所編) 2012、全p390(pp.278-280)

(20) 橋本 義則、韓国慶州市、日本古代の曲水宴、新羅庭園総合調査基礎学術研究、2011、全250p(pp.78-90)

(21) 妹尾 達彦、明治大学大学院文学研究科、洛陽学の可能性、洛陽学国際シンポジウム - 東アジアにおける洛陽の位置 -、2011、全217p(pp.207-217)

(22) 妹尾 達彦、学生社、唐代の長安と洛陽 - 陸の都と水の都 -、宮都飛鳥、2011、全233p(pp.86-107)

(23) 田中 俊明、サンライズ出版、百済の複都制をめぐる問題、琵琶湖と地域文化 林博通先生退任記念論集、2011、全458p(pp.365-377)

(24) 田中 俊明、吉川弘文館、日本・朝鮮の軍事遺跡、律令国家と東アジア 日本の対外関係2、2011、全340p(pp.285-304)

(25) 橋本 義則、吉川弘文館、古代宮都の内裏構造、2011、全336p

(26) 橋本 義則、京都大学学術出版会(研究成果公開促進費)、東アジア比較都城史研究の試み - 東アジア比較都城史研究会のあゆみ -、東アジア都城の比較研究、2011、全432p(pp.V-XIV)

(27) 橋本 義則、京都大学学術出版会(研究成果公開促進費)、日本古代の宮都と葬地、東アジア都城の比較研究、2011、全 432p (pp.230-254)

(28) 橋本 義則、京都大学学術出版会(研究成果公開促進費)、日本古代宮都の禁苑概観、東アジア都城の比較研究、2011、全 432p (pp.344-369)

(29) 妹尾 達彦、京都大学学術出版会(研究成果公開促進費)、隋唐長安城と郊外の誕生、東アジア都城の比較研究、2011、全 432p (pp.106-140)

(30) 妹尾 達彦、京都大学学術出版会(研究成果公開促進費)、隋唐長安城の皇室庭園、東アジア都城の比較研究、2011、全 432p (pp.269-329)

(31) 田中 俊明、京都大学学術出版会(研究成果公開促進費)、古代朝鮮における羅城の成立、東アジア都城の比較研究、2011、全 432p (pp.23-41)

(32) 田中 俊明、京都大学学術出版会(研究成果公開促進費)、朝鮮三国の陵寺について、東アジア都城の比較研究、2011、全 432p (pp.188-207)

(33) 田中 俊明、京都大学学術出版会(研究成果公開促進費)、新羅の始祖廟・神宮、東アジア都城の比較研究、2011、全 432p (pp.398-403)

(34) 新宮 学、京都大学学術出版会(研究成果公開促進費)、中国近世における羅城 明代南京の京城と外郭城の場合、東アジア都城の比較研究、2011、全 432p (pp.3-22)

(35) 新宮 学、京都大学学術出版会(研究成果公開促進費)、北京城と葬地 明王朝の場合、東アジア都城の比較研究、2011、全 432p (pp.141-164)

(36) 新宮 学、京都大学学術出版会(研究成果公開促進費)、明清北京城の禁苑、東アジア都城の比較研究、2011、全 432p (pp.370-373)

(37) 新宮 学、京都大学学術出版会(研究成果公開促進費)、明嘉靖年間における北京天壇の成立と都城空間の変容、東アジア都城の比較研究、2011、全 432p (pp.395-397)

(38) 桑野 栄治、京都大学学術出版会(研究成果公開促進費)、朝鮮都城史研究の現況、東アジア都城の比較研究、2011、全 432p (pp.87-90)

(39) 桑野 栄治、京都大学学術出版会(研究成果公開促進費)、朝鮮王陵研究の現況、東アジア都城の比較研究、2011、全 432p (pp.255-258)

(40) 桑野 栄治、京都大学学術出版会(研究成果公開促進費)、朝鮮初期の「禁苑」 景福宮後苑小考、東アジア都城の比較研究、2011、全 432p (pp.330-343)

(41) 桑野 栄治、京都大学学術出版会(研究成果公開促進費)、朝鮮初期の園丘壇と北郊壇、東アジア都城の比較研究、2011、全 432p (pp.379-394)

(42) 小嶋 芳孝、勉誠出版社、渤海の交通路、古代東アジアの道路と交通、2011、全 416p (pp.211-232)

(43) 橋本 義則、塙書房、律令国家と喪葬-喪葬官司と喪葬氏族の行方-、律令国家史論集、2010、全 587p (pp.179-206)

(44) 妹尾 達彦、台湾・新文豊出版公司、都城図中描繪的唐代長安の城市空間、張広達先生八十華誕祝寿論文集上冊、2010、全 744p (pp.211-243)

(45) 妹尾 達彦、中央大学出版部、都市の千年紀を迎えて-中国近代都市史研究の現在-、アフロ・ユーラシア大陸の都市と宗教(中央大学人文科学研究研究所研究叢書 50)、2010、全 274p (pp.63-140)

(46) 田中 俊明、韓国古代史学会・忠州大学校博物館、中原京の諸問題、中原文化財発掘100年回顧と展望、2010、全 352p (pp.311-331)

(47) 小嶋 芳孝、北海道大学出版会、クラスキノ城跡井戸出土土器群の考察、北東アジアの歴史と文化、2010、全 606p (pp.213-229)

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田中俊明 (TANAKA, Toshiaki)
滋賀県立大学・人間文化学部・教授
研究者番号：50183067

(2) 研究分担者

小嶋芳孝 (KOJIMA, Yoshitaka)
金沢学院大学・美術文化学部・教授
研究者番号：10410367

桑野栄治 (KUWANO, Eiji)
久留米大学・文学部・准教授
研究者番号：80243864

橋本義則 (HASHIMOTO, Yoshinori)
山口大学・人文学部・教授
研究者番号：60164802

妹尾達彦 (SEO, Tatsuhiko)
中央大学・文学部・教授
研究者番号：20163074

(3) 連携研究者

井上直樹 (INOUE, Naoki)
京都府立大学・文学部・准教授
研究者番号：80381929

新宮学 (ARAMIYA, Manabu)
山形大学・人文学部・教授
研究者番号：30162481